

話し合い（関係性）を保育の原点に

2013年4月 園長 片山喜章

3月下旬、法人会議のなかで、大阪に在る施設の園長が「自園で、0歳児が、0歳児にいっしょうけんめいごはんを食べさせている光景にであった」と驚きを交えた報告がありました。その園では、0歳児から集団で食事をし、1歳児でも3人グループで当番活動のまね事を真剣？に楽しみながら食事をしています。大人社会において、飲食を伴うことで親交を深めることができるように、幼児に限らず赤ちゃんも“食事をする喜び”のなかに“学びのチャンス”があるらしいです。「食べながら遊ぶな」と大人たちは言いますが、子どもは、食べながらいろんなことを学ぶ機会を伺っている、と理解してよいでしょう。

上記の0歳児の例は、日常生活のなかで子どもどうしがかかわりあっている、つまり、子どもどうしがお互いの関係性のなかで学び合い、育ち合っている証です。（種の会という法人は、保育の方法を統一していません。保育方法は、各施設の独自性を尊重し、目の前の子どもを観察し、他園を見学しながら、園内の職員集団が語り合って創りだします）。

マスメディアやバーチャルな世界が、日々、子どもたちの心の世界をどんどん浸食し、生き物としての人間自体が変容しだしているこんにち、公教育（保育）は、個々の子どもの好奇心や探究心を刺激する環境を準備し、それに応える時間を保障する事。そして“子どもどうしのかかわり合い”による学びを意図する事です。それこそが「生きる力」の根幹に関わることです。この点を押えた《保育の視点》《生活の流れや環境づくり》がどうしても必要です。子ども（たち）に任せ、委ねる、そのための「導きと見守り」による保育者の関わり方が問われます。けれども「子ども主体」と言いながら、知らず知らずのうちに保育者の描いた枠組に子どもを押し込んで、枠から逸れたその子なりの精いっぱいの見（思い）を平気でスルーしたり、逆に何でもかんでもOKしてしまうと、子どもの意欲が散漫になり、私たちはこの《困難》を深く認識しながら、保育しなければなりません。

とにもかくにも話し合い。「話し合う保育」「話し合う園運営」が大事です。子どもどうしが話し合う日常づくりが第一の課題ですが、そのモデルとして、私たちは、常に子ども（たち）に尋ね、思いを引き出し、双方向で話をする。乳児もお世話する事と併行して、語りかけや問いかけを基本にする習慣を会得する事、これは保育園だけでなく、ご家庭でも実践していただきたい事です。子どもは稚拙でもかかわり合うことで、自分を学び（知り）、相手を学ぶ（知る）、そこから、より高次の自己発揮や自己を抑制する「生きる力」が養われると展望します。最後に、私たちと個々の保護者の方々との話し合い。当たり前のことですが、これほど大事なことはありません。もしも、気兼ねしあったり、対峙しあったりするならば、子どもたちは、どんなに辛くて、悲しい思いを抱くことでしょう。